



さよなら
うな
ら
こころ
いもち
ば
竜
生
人生
20

GOOD BYE
DRAGON LIFE

永島ひろあき
HIROAKI NAGASHIMA

目次

第一章	ジャルラ来訪	7
第二章	人生最大の戦い	77
第三章	雨 <small>あめ</small> 来る <small>きた</small>	116
第四章	聖都強襲	172
第五章	神ならぬ神	248

主な登場人物

MAIN CHARACTERS

ドラミナ

ドランの婚約者で
よき相談相手の
元バンパイア
クイーン。

クリスティーナ

“竜殺しの因子”を受け継ぐ
絶世の美人剣士。
ベルン男爵に
叙された。

ディアドラ

妖艶な黒薔薇の精。
ドランの恋人の一人で
ベルン村の植物園を
管理している。

ハークワイア

聖法王国^{でんいしほし}の天意聖司。
突飛な言動が目につくが
人間離れした
実力を持つ。

セリベア

セリナの母で、
ラミアの里ジャルラの
女王をしている。

セリナ

ドランと婚約を果たした
ラミアの美少女。
ドランの心の拠り所
でもある。

ドラン

最強の古神竜“ドラゴン”の
転生した姿。
クリスティーナの下で
故郷ベルン村の発展に
取り組む。

第一章—— ジャルラ来訪

ベルン男爵クリスティーナは、新興貴族として規格外の財力と繁栄^{はじさい}ぶりを見せ、今やその領地は大陸で最も活気づく地域になりつつあった。

アークレスト王国の北端に位置するベルン村には、実に多くの人々が多種多様な目的で出入りしている。純人間、各種獣人、エルフ、樹木や草花の精、ドワーフ、リザード族、果ては竜種までと、ちよつとした種族の見本市のような状態だ。

当然、そこには様々な勢力の諜報員^{ちやうほういん}も紛れ^{まぎ}れている。

ある意味、ベルン村の環境は、色々な種族や経歴の諜報員^{ちやうほういん}を潜り込^こませやすい土壌^{どじやう}が出来ているわけだ。

隣国であるロマル帝国や高羅斗国^{こらとこく}、轟国^{ごうこく}はもちろん、海の向こうや東西の遠国からも諜報員^{ちやうほういん}は派遣^{たくい}されている。その中には暗殺ギルドや有力な犯罪組織、秘密結社といった非合法組織の類^{たぐい}も含ま

れていた。

しかし、ベルン側がその気になれば、彼らがどこで誰と会い、何を話していたか、領内全員の行動を把握する事も容易い。それを知らぬ諜報員達のほとんどが、踊らされている状況にある。

ベルン男爵領側——クリステイナーやその補佐官を務めるドラランがそれらを咎めないのは、諜報員らが持つ表の顔が役に立つからだ。

商人や傭兵、医師、聖職者といった肩書きがもたらす利益が害を上回る限り、あるいは領民に危害を加えない限りは、彼らはベルン男爵領でのささやかな活動を見逃されている。

そんな諜報員の中でもとりわけ特別な素性を持つ一人が、拠点として宿の一つで夜半に主人へと報告を入れていた。ベッドで眠るふりをしながら思念で上司に呼び掛ける。魔法とは異なる技術によって、彼の所属している組織ではるか大陸の北方に座する同胞と瞬時に連絡を取る事が可能となっていた。軍事的にも技術的にも極めて驚異的な技術である。

(最優先監視対象「ドラゴンスレイヤー」を捕捉。所有者はベルン男爵クリステイナー・アルマディア・ベルン。これより継続して監視活動を行います)

『ドラゴンスレイヤーは大魔導バストレルの手から離れた古の至宝。監視は慎重に慎重を重ね、こちらの存在を悟られぬように細心の注意を払うがよい』

その諜報員が見つけたのは、クリステイナーの腰で揺れる古神竜殺しの剣。伝説の中の伝説として

て語られる古の文明が作り出した、この世において最強の兵器だ。

今はドラッドノートと呼ばれるその剣のかつての名前を口にした誰かは、遠い地から思念で伝えられた命令に恭しく応えた。

(御意)

『汝に我らの神の祝福と加護があらん事を』

その言葉をもって両者の通信は途絶え、諜報員は本当に眠りに就いた。監視対象であるクリステイナーの周囲には、バンパイアの秘書や、アークレスト王国最強の大魔女の後継者と見込まれている補佐官といった強者達が控えている。遠方からの監視でさえ神経を削られる為、諜報員は疲れており、泥のような眠りに落ちた。

ドラランやクリステイナー達にしてみれば、新興貴族として破格の発展を遂げる自分達のもとへ、様々な思惑によって諜報員が送り込まれるのは想定の内だ。

それでも、新たな嵐と呼べるほどの争乱が近づきつつあるのを、そしてソレが既に自分達の懐に入り込んでいるのを、ドララン達は知っていたかどうか……

領地運営で多忙を極めていたクリステイナーは、ドラン達友人の配慮により、遠く離れた国の迷宮で冒険者体験を楽しんだ結果、心身共に澆刺として一層政務に注力しはじめた。

この頃になると、ベルン村近郊に大邪神カラヴィスと大地母神マイラール、大神ケイオスらが深く関わる塔が存在するという情報、ガロア以外の都市にも広まっていた。

お蔭で、功名を得ようとする冒険者や、金の匂いを嗅ぎつけた商人達が街道に列をなすようになっていた。

また、ベルン村でのみ販売されている、エンテの森産出の希少な草花を用いた香水や葉を求める者も着々と増えていた。

特に、黒薔薇の精ディアドラが作る香水が、王国全域の富裕層の間で流行している為、これを求める貴族のご婦人方やその使い達の姿も散見されるようになっていた。

ベルン村を訪れる者の中で一番多いのは、開拓した土地が自分のものになるというお触れを知り、土地持ちになろうと夢を見る農家の次男、三男以下や、自由労働民などだ。

労働力を欲するベルン男爵領としては多少脛に傷を持つ身であろうと構わず受け入れている。無論、治安を乱す者に容赦はしないが。

ベルンの大地を踏む者達を一番に迎えるのは、新しく建築された防壁とその門だ。

クラウゼ村とベルン村を繋ぐ整備された大規模な街道や宿泊施設、街道を飾る真に迫る石像群だ

けでも来訪者は度肝を抜かれるが、防壁と門はまた一味違う。

目下、唯一街道と繋がっているのは南門で、ここがベルンを訪れた者が最初に目にする村の一部である。その為、クリステイナー達はこの門とそこを守る兵士達の見栄えや質を極めて重要視していた。

徹底的に磨き抜かれ、軽量化、対魔法処理、身体強化魔法などが付与された鎧兜を纏い、ハルバード、長剣、短剣、弓矢、円盾で武装した兵士達。彼らには、一見地味ながらこれから発展していくベルン男爵領にとってこの仕事がいかに重要であるか、クリステイナーから直々に薫陶が与えられていた。

団長であるバランを筆頭に、ベルン騎士団の中から選抜された兵士達の顔には職務への誇りが輝いている。

彼ら以外にも、ドランが正式に魔法ギルドに特許申請した量産型ゴーレム達が防壁に沿ってずらりと並び、非常時の備えは万全だ。

そして、武力や魔法と全く関わりのない一般の人間でも目を奪われるのが、新たな防壁だった。

以前はディアドラが無数の黒薔薇とその荊で防壁を覆っていたが、彼女の真似をしたがったエンテの森に住む様々な植物の精達によって、さらに絢爛に飾り立てられている。

四季折々の花々や様々な樹木の幹や蔓が防壁の表面を覆って、ベルン男爵領にしかない特殊な外

観を生み出していた。

中には門を通る前に足を止めて詩作に耽る者や、無地のキャンバスを広げて熱心に筆を振る者も居る。

ベルン男爵領側も防壁自体を観光の対象とする者に向けて、門の前に馬車を停める為の駐車場やカフェ、屋台、飲食用の広場などを設けて、村の外にも経済活動の場を広げていた。

この防壁が完成しているのは、エンテの森側の東とモレス山脈側の北、クラウゼ村に繋がる南の部分のみ。

魔族や魔物が棲まう不毛の地——暗黒の荒野へと続く西、北西の部分については、今後の開拓に関わる部分である為、仮設の状態だ。

その代わり、暗黒の荒野方面には防壁の建設と並行して、監視用の小規模な砦を複数建設する話が進んでおり、作業用のゴーレムと兵士達が建設作業に勤しんでいる。

そんなある日、クリステイナーナの屋敷を訪ねる特別な一団があった。

元はベルン村の駐在兵士の一人であり、今では騎士の位を正式に与えられたクレスが、客人達を連れて帰ってきたのである。

彼は兵士達と古参の村人数名、そして進物を載せたホースゴーレムの馬車数台と共に、北のモレス山脈に移り住んだりザード族のもとを訪れる任務を受けていた。

リザード族が元々住んでいたベルン村北西の沼地を本格的に開拓する計画が動きはじめ、今後の軋轢と愛を取り除くべく、話し合うのが目的だ。

私的な話としては、ドランとセリナが初めて出会った場所であり、彼らにとっては思い入れの深い場所でもある。

旅の汚れを清めてからクリステイナーナのもとへ足を運んだクレスの隣には、リザード族からの若い使者四名が同伴していた。

幸い、リザード族は沼地の利用に関して、既に自分達が離れた土地であるからと、ベルン側での利用に異議は申し立てず、途絶えていたベルンとの交流の再開を喜んだ。

リザード族がモレス山脈にある湖近くに居を移した為、交易の品目には若干の変化が見受けられた。

主にベルン側からは加工食品や布製品、嗜好品が輸出され、リザード族側からはモレス山脈で産出される金属類と岩塩が輸出される。

特にベルン男爵領上層部を喜ばせたのは、生存に欠かせない塩を得られる手段が増えた点である。ベルン村は、広く海洋を治める竜宮国とも独自に塩の売買契約を結んでいるが、塩を確保する手段が複数あるのに越した事はない。

さて、リザード族は人間より頭一つか二つ分大きい二足歩行の蜥蜴という外見をしているが、四

名の使者の中にはリザード族以外にも蜥蜴人の男女が含まれていた。

リザード族は端的に言ってしまうえば人間と同程度の知能を備えた二足歩行の巨大蜥蜴であり、種としての系統樹は爬虫類に属する。

一方蜥蜴人は、複数の神々が協力して生み出した人間の原種を始祖とし、蜥蜴の特徴を付与して生み出された人間の亜種、亜人だ。あくまで人間の要素が主であり、蜥蜴としての特性は副次的なもので、種としての系統樹も人間に属する。これは亜人と呼ばれる種族に共通する性質だ。

一括りにしてしまうのはかなり乱暴とはいえ、同じ蜥蜴の要素を持つ者同士、リザード族と蜥蜴人が共に暮らしている例は珍しくない。

彼ら若い四人の使者はこのままベルン村に滞在して、後々やってくるリザード族の交易団の窓口と、滞在用の施設建設の助言者役を兼ねる。

これは、かねてからクリステイナーとドララン達が計画していた、モレス山脈に生息する他種族との交流が前進しつつある証左と言えよう。

モレス山脈の他種族との交流に進展があったのは、リザード族だけではない。

元々ベルン村には付近の大河から枝分かれた川が、北東から南西へと向けて流れているが、今ではさらにその川から村内のあちこちへと水路が延ばされている。

水に乏しい暗黒の荒野方面に開拓の手を広げるのだから、井戸掘り以外に水路を広げていくのは

当然ではあるとはいえ、ただの水路というわけではない。

網の目の如く細かく張り巡らされ、しかも一つ一つが最低でも小船がすれ違える幅がある。

また上流からの流れを引き込む北側も、これまでは大型の水棲生物の侵入を防ぐ鉄格子を巡らせていたのが、今では巻き上げ式の頑強な水門が設置されていた。

上流を流れる大河の方にも手が加えられていて、両岸に大河から水を引き込んで作った小さな溜め池がいくつも作られ、栈橋と小さな小屋が併設されている。

これらは水竜ウエド口の庇護のもと、リザード族とは別の湖に住んでいるレイクマーメイドの氏族『ウアラの民』が、ベルン村にやってくるまでの道中で体を休める為のものだ。

湖や池、地下水脈を通じてモレス山脈各地を行き来していた彼女達は、ウエド口の勧めもあり、ベルン村との交流を応諾した。

彼女らがもたらすのは、水竜ウエド口や彼女達自身の鱗、湖底で産出される高純度の水精石、魚醬等々。

村に巡らされた水路は人魚達の為の道で、ベルン側はそれなりの資金と労働力を投じて、彼女らがベルン村の中を移動出来る環境を整えた形だ。

モレス山脈に住む諸種族との交流推進という目的以外にも、水竜の庇護を持つ種族と交流を持つ事は、対外的に一種の外交圧力として機能する。

八方美人と揶揄されかねないベルン村の施策だが、そこには強かな一面もある。

ベルンがこうした周辺諸種族との交流と協力体制を着々と進めているのは、遠からず暗黒の荒野から統一された勢力による侵略があると予測し、それに備える為でもあった。

また、人造人間『ファム・ファータル』こと天恵姫を巡る東方での戦いに、周辺国家とは異なる謎の勢力が関わっていた事も、これらの行動に拍車を掛けた。

もともと、ドランの本当の実力を考えれば、協力体制を整えて侵略に対抗するというより、周辺諸種族に魔の手が伸びる前に保護の手を回した、という見方が出来るだろう。

クレスの帰還と入れ替わるようにして、ベルン村では別の使節団が、モレス山脈に存在する種族の隠れ里へと出立しようとしていた。

いつも通り、峻険なモレス山脈でも問題なく歩行出来るホースゴーレム達が牽引する複数の馬車と、交渉を担当する文官や護衛の兵士達に労働力としてのゴーレム達。

ただ、今回の訪問先の特異な事情を考慮し、使節団はほぼ全員が男性で、いずれも健康かつなるべく見目の良い者達が選抜されている。

その為、これまでの使節団に比べるとかなり人数が少ない。

とはいえ、頭数が減った分の労力はゴーレム達が負担してくれるから、道中、さしたる支障は出ないだろう。

そしてこれまでと異なる最も大きな点は、普段なら後進の育成を邪魔してはいけないという理由で使節団に同行しないドランの姿がある事だった。ドランの傍らに居るのは、彼の婚約者である、ラミアの娘——セリナのみ。

複数の婚約者を持つ今のドランの状況では、数時間程度ならばともかく数日に及ぶ道行きに女性が一人しか同行しないというのは、かなり稀である。

たとえそれが公的な事情によるものであれ、ドランの所有物であると自らを認識するリピングゴーレムのリネットの姿までないのは妙だ。

しかし、これにはこれから彼らの赴く先が大いに関係していた。

旅装に着替えたドランはほんの僅かにではあるが緊張した様子を見せ、反対に日除けの帽子を被っているセリナは上機嫌に頬を朱に染めている。

「ふふふ、思っていたよりもうんと早く帰れて、私は嬉しいです。それにドランさんを紹介出来るからなおさらです！」

むふー、と満足げな吐息を零すセリナを、ドランは慈しみに満ちた眼差しで見ると見る。

はつきりと恋人、婚約者であると明言する仲になった両者ではあるが、ドランがセリナに対して孫娘を見守る祖父めいた心情を失わずにいるのも確かであった。

「以前から話していたとはいえ、私としては緊張せざるを得ないな。セリナのご両親にご挨拶をす

るといふのは、いやはや、父さんやディラン兄にいに聞いていた以上に身の引き締まる思いになる」

「ママもパパもそんな怖い人達ではありませんよ？ でもママは里の代表ですから、当然厳しい態度で臨むとは思いますが。ドラランさんが私の将来の旦那様だんなさまだからといって、手加減はしてくれないでしょう。公は公、私は私、そう割り切っている人ですから」

「立場に相応ふさわしい心構えをお持ちだね。ラミアの隠れ里ジャルラとベルン村との正式な交流は、双方にとって益となるものだ。それをきちんと伝えられれば、交渉は上手くいくと信じている。私が緊張しているのは、私がセリナ以外の女性とも婚約している事を、母君も父君も良くは思わないだろうという不安のせいさ。我ながら情けない話だが、ふむん」

今回の使節団の赴く先は、人口約一千人というラミアの隠れ里ジャルラ。

セリナの生まれ故郷であるこの隠れ里へ、彼女が伴侶はんりよとして選んだドラランを連れて行くという目的も密かに含まれていたのである。

また、団員が見目の良い男性で構成されているのは、子をなすのに異種族の男を必要とするラミア達に、ベルン村と交流を持つ事で得られる利益を分かりやすく知らしめる為だ。

ともすればジャルラへ滞在している間に、何人かの団員はある意味で食べられてしまい、ラミア達に新たな命を宿らせる結果になるかもしれない。

「ま、まあ、それほど深刻に考えなくてください。元々、男の人がどうしても足りない時とか、お互いに同じ人を好きになってしまった場合には、男性を共有する習慣もあるくらいです。そこまで強く問題視はされないと思いますよ？」

「あまり自信がなさそうな口ぶりで言われると、今ひとつ安心出来ないなあ。それに私とセリナの場合は、ジャルラの風習とは反対だからね。可愛い娘以外にも関係を持つ女性が居るなどと言われている、親の立場では不快に思われても仕方ない。というよりも、それが当たり前だ。それに私はジャルラへ入り婿むことして赴くのを拒否しているのだから」

「うう、なるべく考えないようにしていたのですけれど、改めて言われると、ジャルラの里にとつて異例いれい尽くめです。ママを説得出来るといいのですが」

しかし、しょんぼりとするセリナに、ドラランは揺るがぬ決意を宿した瞳で語り掛けた。

「なに、セリナの旦那様だんなさまになるのを決して諦めたりはしないとも。セリナの母君達を説得して、ベルンとの交流もセリナとの結婚も認めてもらう。それに変わりはないよ」

そのドラランの言葉を聞いたセリナがどんな反応を示したかは、語るまでもなかった。

十

北西の彼方かなたから暗黒の荒野を渡ってきた風は、静まりつつある戦乱の血の残り香かを運んできてい

るのか、どこか錆びめいた臭いを含んでいるように思われる。

その微かな臭いに、古神竜ドラゴンの生まれ変わりである私——ドラン・ベルレストは、少しだけ眉を寄せた。

太陽は地平線の向こうに沈み、世界を彩る化粧は茜色から暗闇の色へと変わりつつある。

ベルン村を出立し、リザード族の居住地であった沼地で開拓団と別れた使節団は、モレス山脈の麓へ順調な道行の最中であつた。

日が沈む前から野営の準備が進められ、焚き火を目印に襲い掛かってくる魔獣を警戒する歩哨達は、抜け目なく周囲の闇を睨みつけている。

野営地のそこかしこには光精石を用いた光源が掲げられ、降り注ぐ月と星の光も相まって、周囲の闇を遠くへと追い払う。

机の上にも光精石を収めたランタンがいくつか置かれていて、光量は充分だ。

使節団の護衛を担う兵士には、ベルン村出身の若者から他の農村出身者、あるいは元傭兵や冒険者達も含まれる。

実戦経験の有無にはバラつきがあるが、採用されてから受けた過酷な訓練のお蔭か、それなりに格好はついている。

この使節団の中で最も地位が高く、責任が重いのが領主補佐官であり使節団代表を務める私だ。

今は野営の為に馬車から降りて、秘書兼案内役であるセリナ、護衛の兵士達の代表の騎士ネオジオと文官の代表シユマルと共に、今後の予定を話し合っているところだ。

組み立て式の机に周辺の地図を広げ、その上に自分達を模した駒を置いて、現在位置を確認し、今後の日程を微調整する。

使節団の護衛を取りまとめるネオジオは、元は小さな傭兵団の団長を務めていた壮年の男だ。

彼は東西で燃える戦争の臭いに新たな商機を見出していたが、年齢を考慮して安定した収入を求めべきか悩んでいた。

そんな折、ベルン村での志願兵募集の話聞きつけた彼は、傭兵団を解散し、ついてきた数名と共に今はベルン騎士団に所属する身となっている。

小規模とはいえ傭兵団をまとめ上げていた経験と、その傭兵団の評判が良かった為、試用期間の後に騎士隊長の一人に任じられた。

周囲が危険な猛獣や毒虫の多い暗黒の荒野とあって、会議の場でも警戒を緩めずに分厚い鎧を着込んだままのネオジオは、いかにも歴戦の傭兵といった風貌だ。

敏深く日焼けした厳めしい顔つきで、横幅が広く、がっしりとした体格をしている。

一方のシユマルは、私の愛しきクリスことクリスティーナ・アルマディア・ベルン男爵の祖父、先代アルマディア侯爵が開拓の責任者だった時に付き従っていた家臣である。

開拓計画が凍結された時にアルマディア領に帰ったものの、敬愛する主君の孫娘が再びベルンの地に赴任したと聞くや、成人した子供らに家を任せて仕官してきた忠義の人だ。

年の頃はネオジオよりも上で、五十代に入ったばかり。今は妻との二人暮らしを満喫しながらベルン領の統治に尽力している。

「ジャルラのママ……ではなく、女王に向けての知らせは既に送っていますので、あちら側の迎いの準備は整っていると考えていただいて間違いはありません」

セリナの語るところによれば、ジャルラの代表である女王は、住人達の投票によって決められるものであり、世襲制ではない。

その為、我がアークレスト王国をはじめとした周辺国の王制と同じに考えるべきではなからう。

それでも、当代女王の娘であるセリナが案内役を務めてくれているのは、使節団の皆に大きな安堵をもたらす。

目下のところ警戒していた魔獣の類の襲撃はなく、このまま順調にいけば、モレス山脈までそう時間は掛からない。

「使節団にはジャルラの近くで一旦待機してもらい、私とセリナで女王への挨拶を済ませ、許可を得てからジャルラへ入る手筈になっている」

ネオジオもシユマルも、私からすれば父親以上に歳が離れた相手である。立場上は私の方が上だ

が、この口の利き方には多少抵抗を覚える。とはいえ、こういった事は今後増えるだろうから、慣れていくしかあるまいな。

幸い、ネオジオもシユマルも気にする素振りは見せていない。心の中ではどうか分からないが、これが大人の対応と見習わねば。

ネオジオは頷いて私に伝え、預けてある兵士達の様子を報告してくる。

「兵達の士気は問題ありませんぞ。規律の方も今のところ緩んではおりません。補佐官殿がセリナ殿と節度を持って接しておられましたのでな」

「男ばかりのところに女性がセリナ一人という環境なのだ。私とて少しは周囲へ配慮もするさ。ジャルラに着いたら、その反動で皆が過剰に浮かれないように祈るよ。ところで、ラミアに対しては流石に慣れてきたかな？ ベルン村出身者ならばともかく、他の土地で生まれ育った者達にとつて、ラミアは魔物だという認識がある。セリナの存在はもう噂で知れ渡っていただろうが、やはり実物を見れば恐れもしよう」

「そちらも概ね問題はありません。ベルン村でのセリナ殿の慕われようと働きぶりは、兵らもすっかりと目にしておりますし、慣れた者の中には失礼ながら鼻の下を伸ばす不届き者もおります。ジャルラで美しいご婦人方に声を掛けられれば、ホイホイとついていってしまう者が出ないよう、注意しなければならんほです。今回の人選についてはあえてのものでしようが、若い連中に

とつては、戦場に出るのは違った意味で過酷だったかもしれません」

「そうか、個人的には異種間交流は歓迎するが、何事にも順序がある。先方の意思も方針も考慮しなければならぬし、もう少し我慢してもらおう。さて、日数の方は事前の予定通りとして、荷の消費はどうか？」

シユマルに尋ねると、こちらにもネオジオと同じく淀みなく答えが返ってくる。想定済みの質問だったのだろう。

「こちらは事前に想定した誤差の範囲内の消費量です。沼地を中継地点として使えば、ジャルラ、ベルン間での物資の枯渇を心配する必要はなくなるでしょう。エンテの森を経由する道を避けて、暗黒の荒野方面からの経路を開拓するという目的も、まずは達成出来そうで何よりです。ジャルラの里の地理にもよりますが、ウアラの民同様に河川を用いた交通路も作れるかもしれませんし、補佐官殿には期待せざるを得ません。山脈を徒歩で往來すると河川を利用するのは、速度も一度に運べる荷の量もまるで違いますからな」

私はベルン村を出立した時から——いや、セリナへの愛情をはつきりと認めた時から変わらぬ決意を口にする。

「責任重大だな。改めて語るまでもないが、最良の結果を得られるように最大の努力を尽くすとも」

私にとって今回の訪問は、公人としての立場の他に、私人としての事情が込み入っているのだが……それはこの場に居ない兵士達に至るまで察しているだろうなあ。

セリナは真剣な眼差しで闇夜に天高くそびえるモレス山脈を見つめながら呟く。

「暗黒の荒野の問題もあります。モレス山脈にまで手が伸びるかは分かりませんが、その脅威を伝えれば、決して間違った選択はしないはずですよ」

セリナにとって今回の使節団への帯同は、生まれ故郷が、数年内に発生するだろう戦渦に巻き込まれるのを防ぐ為、あるいはその被害を最小限に留める為の帰還でもある。

使節団の中にあつて、最もジャルラとの未来を案じ、憂えているのはセリナに他ならない。であるならば、彼女の胸の内に去来している不安の雲を晴らすのが、私の何よりの役目である。

十

野営地から出発した私達は、予定通りにモレス山脈へと進路をとった。

岩石と幾ばくかの緑が点在するばかりの荒涼としていた暗黒の荒野の光景だが、山脈に近づくと従って徐々に緑の割合が増え、生き物の姿を見かける頻度も増していく。

モレス山脈の麓はエンテの森から続く深い森林地帯で、山脈から流れる大小無数の河川と豊富な

地下水脈によって、無数の命が生きる豊潤な大地になっている。

セリナがジャルラを出た際、彼女は川沿いに進んで最も近い人間の集落、つまりベルン村に近づき、そこから一旦暗黒の荒野側に進路をとった。そして、リザード族の住んでいた沼地で休んでいたところで私と出会っている。

今回はセリナの進路を逆に辿る形になったわけだ。

今後の戦乱を見据えれば、モレス山脈と沼地の間に砦の一つくらいは用意しておきたいものだな、ふむん。

ありがたい事に、モレス山脈麓の森林地帯では、現地のウッドエルフや獣人達が私達の到着を待っており、森林地帯を抜けるまで案内役を務めてくれた。

これはエンテの森の世界樹——エンテ・ユグドラシルからのお墨付きを得られたお蔭だろう。森の住人達には効力絶大だが、その分、彼女の期待と信頼を裏切らないようにと身が引き締まる思いだ。

使節団の者以外の人間と会うのは数日ぶりだった上に、案内役の中に女性が複数居たので、団員達がやたらと話したが、ネオジオの怒鳴り声と共に拳骨が何度か振るわれる羽目になった。

ま、微笑ましいと言える範疇かね。

森林地帯を抜けてモレス山脈に入ると、道らしい道がろくにない険しい道行きとなる。

これまでほとんど人跡がなかった事もあって、ジャルラへの道筋は全くの手つかずだ。

と言うのも、ジャルラは他種族の目から隠蔽するように造られた隠れ里である為、里へと続く道の整備など論外なのだ。

土よりも剥き出しの岩肌が目立つ山道だが、ホースゴーレム達は悪路をものともせず馬車を引き、兵士達もひいひいと息を切らしながらも追従してくる。

最も足の遅い者に歩調を合わせて、適度に休憩を挟みながらの登山になるので、速度はそう速くはない。

ジャルラまである程度近づいた地点で私達は行進を止めた。

山腹で邪魔な石をどかして木を払い、魔法なども使って地面を均し、あつという間に野営に適切な広場を造る。そうしてから、私はネオジオとシユマルに使節団を委ねた。

ここから先は私とセリナの二人きりで進む。

「これだけ険しい山道では、山脈を下りるだけでも大変だな」

しみじみと語った私の言葉に、セリナが応える。

「まあ、人里から離れるとこういう環境を選ばざるを得ませんから。私の場合は小さい頃からここで育ったので、別に気にはならないのですけれど」

「君達の伴侶探しも苦勞が多いな」

「最近は里の人口が増えてきたので、中で相手を見つめる娘もちらほら居るのですよ。あまり血が近すぎるのは良くないですから、私みたいに外に出る娘の方がまだまだ多いですけれどね」

「千人前後だったか……セリナと出会った頃のベルン村の三倍以上の人口だな。この環境でよくぞそこまで増やしたと思うよ。ジャルラのような隠れ里は世界中に点在しているだろうが、よその里との交流はあるのかい？」

「ん、確かエンテの森のどこかにもラミアや蛇人へびひとの里があつて、何年かに一度くらいは代表同士で連絡を取り合っていたとかいらないとか。いずれにせよ、閉鎖的へいさてきであるのは確かです。女王にならなないと教わらない情報も多いと思います」

「重要な情報を知る者は少ないほど漏洩ろうえいの危険性は少ないか。人間からの扱いを考えれば当然の危機意識だな。今回の訪問が良い方向へと進んでくれれば何よりだが……」

「大丈夫です。ベルン男爵領との交流が良い事がたくさんあるって、精一杯伝えますから。それに、ベルン村だけじゃなくなつてガロアの辺りまでなら、ラミアが街中を歩いていても少し驚かれるくらいで済むようになりましたし。伊達だてに一年近くガロアで過ごしたわけじゃありませんよ！」

「ラミアの集団が闊歩かつぽするとなれば、ベルン村はともかくガロアであつてもまだまだ驚かれてしまふだろう。時間は掛かるが、ラミアが交流可能な存在であるという認識をベルン村から徐々に広げていくのが先かな」

「急ぎすぎると悪い結果になりがちですから、仕方ないですね。それに、伝承みたいな恐ろしい悪さをするラミアだつて居るでしょうし」

「人間の中にも極悪人はゴロゴロいるさ。それと同じだよ。さて、そろそろ直接お目に掛かれる頃合いかな」

使節団せんせつだんが山麓さんろくに到着した時点で、使い魔おまと思しき蛇達へびが何十匹も岩陰などに潜みひそ、じつとこちらの動きを観察していた。

「ところで、あの蛇達はやはりジャルラのラミア達の手のものかな？」

「はい。私達ラミアは体の半分以上が蛇ですから、蛇さんとは意思が通じやすいのです。なので、よく私達の目と耳の代わりをしてもらっています。私もガロアで時々やっていました」

耳に口を寄せてこしょこしょと話し掛けると、セリナは声を潜めて教えてくれた。以前はこれくらいでの事でも恥ずかしがったが、今では流石に慣れたものだ。

「ふむ、自衛策としては妥当だとうなところだろうな。私も簡単な使い魔の契約なら小鳥やら虫やらと結ぶし、利便性が高い。ただ、君達にとっては良き隣人といった意識の方が強いかな？」

「そうですね。別に使い魔の契約を結ばなくても意思は通じますが、視覚や聴覚を共有する時には使い魔契約を結ぶのが一番です。今も里から私とドランさん、それに使節団の皆さんを見ているわけですね」

「セリナの連絡を受けてから、隠れ里の者達は使節団が到着するのを一日千秋の思いで待っていたのだろう。ふふ、心して掛からねばな」

ベルンとの交流が上手くいけば、今後は危険を背負わせてまでラミアの少女達を隠れ里から旅立たせる必要がなくなり、安全に伴侶探しが出来ようになる。

一方で、最悪の場合には魔物であるラミアに対する迫害ないしは討伐が行われる可能性も考えていよう。

セリナが操られてジャルラの位置を教えてしまったのか、それとも本当に伴侶として私を見つけ出し、またベルン村との交流を文字通りの意味で進める為に来たのか。それを見極めようとしているのだろう。ふむん。

やがて、私達の監視をしていた蛇達が音もなく気配と姿を消した。

本命の方達がそろそろ姿を見せてくれる前兆かな？

セリナが目印の一つだと教えてくれた赤茶けた大岩を回り込んだ先で、私は自分の予想が間違いはなかったのを確認出来た。

山肌の盛り上がりや岩石の陰に巧妙に隠されたジャルラへの入り口の一つを背に、何人ものラミア達が私達の訪れを待っていたのである。

獸人や人間の姿もいくらか紛れているが、こちらはラミア達の伴侶か、その子供達であろう。生

まれてくるのが女の子ならばラミアに、男の子であるならば父親と同じ種族になるのが、ラミアという種族の生態なのだ。

私とセリナの前に立つラミア達は、鮮やかな赤や目の醒めるような青など鱗や髪の色も様々だ。

どうやらそのほとんどがセリナの知り合いのようで、彼女は私の傍らで緊張と安堵を同時に滲ませる。なんとも器用な真似をするものだ。

異種族の雄を誘惑する性質を持つラミアは、個体数の多い人間とその亜種である亜人を誘惑しやすいように、美的基準が高い種族だ。

その美人揃いの真ん中に居るのは、セリナと同じ深緑色の鱗を持つラミアだった。前髪の左右だけ長く伸ばした金髪に、意志の強さを感じさせる瞳は青色。

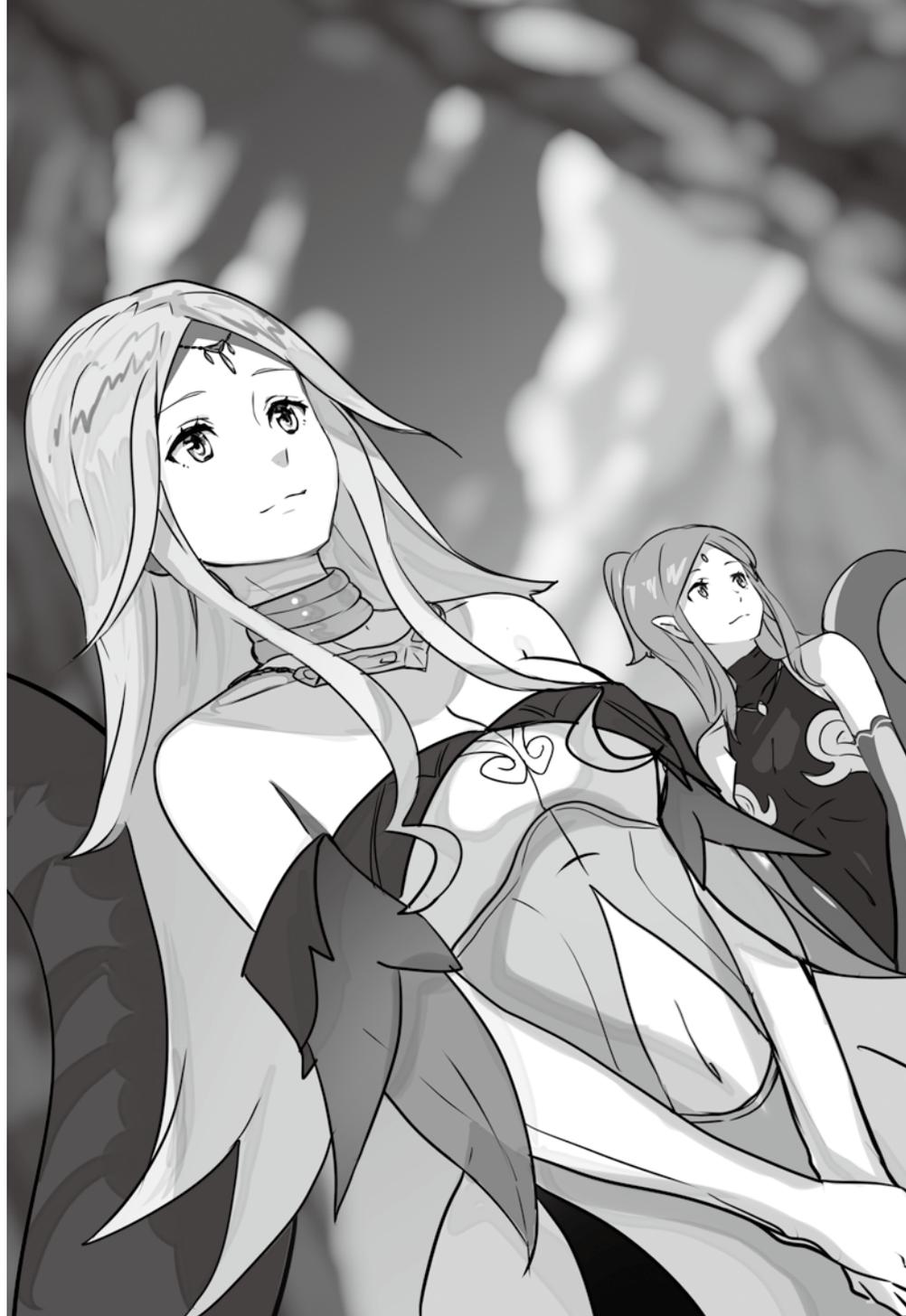
セリナとの共通項が多いところを見るに、血縁者か——いや、ジャルラの女王を務めているという母君か？

その女性が口を開く。

「遠くベルン村から我らの隠れ里ジャルラへと、よくおいでくださいました。私はジャルラの女王セリベア。そちらのラミア、セリナの母でもあります。お見知り置きを」

挨拶一つとっても、異性を惑わすラミアの特性を充分に理解させる艶めかしさだ。

母としての顔は覗かせず、あくまでもジャルラの代表としての態度を崩さぬセリベア殿を前に、



セリナも話し掛けたいのをぐっと堪えて押し黙る。

余人が居ては母と娘としての振る舞いは出来ないか。

話を早めに進めたいものだが、さて。

「ベルン領主クリスティーナ・アルマディア・ベルン男爵の補佐官を務めております、ドラン・ベルレストと申します。この度はベルン男爵の名代として参上仕りました」

「お名前と来訪の目的に関しては、セリナからの知らせで存じておりますわ。まずは我らの里へご案内いたしましょう」

しゅるりと鱗と地面の擦れる僅かな音を立てて、セリベア殿が背を向け、他のラミア達もそれに従う。

セリナが何か言いたそうに母親の背中に視線を送り、他のラミア達は彼女を案じるように見つけたが、セリベア殿は振り返らなかった。ふむん。

セリナも立派な大人なのだし、セリベア殿は集団の代表だ。弁えるべき場なれば、私情を抑えなければならん。

セリベア殿に続き、緩やかな傾斜になっている下り坂を進むと、巨大な自然石を使って建てられた岩戸が私達を待っていた。

岩戸へ続く道から死角になる窪みや岩陰には、押し殺された気配がいくつもあつた。それなりの手

練れでもなければ気付けない。隠れ里の警備は充分になされているな。

どこかから歯車の噛み合う音が聞こえ、岩戸がゆっくりと左右に引き込まれていく。

その先に繋がる道を進むと、空からの目を誤魔化すように岩壁の中や地下に設けられた家屋が見えてきた。

それぞれの窓から住人達が顔を出し、こちらを覗いている。

ワイバーンやグリフォンをはじめ、モレス山脈には空を飛ぶ魔物や猛獣の類は少なくない。ラミアならばそう簡単に餌食にはならないとはいえ、里には幼い子供や老人も居るのだから、当然の備えか。

「ここでセリナが生まれ育ったのだな」

ラミア達の隠れ里を眺め、ふと零れた私の眩きに、セリナがしみじみと応える。

「はい。ベルン村みたいに皆で助け合って、仲良く暮らしているんですよ。うーん、私が出立した時と変わりはしないですね。良かった」

「ふむ、セリナとしては、まずは一安心か。母君と家族水入らずで話せる時間も必ず来る。それまでも少しだけ我慢出来るかい？」

「私はもう立派な大人ですよ？ それくらい我慢出来ます。もう、ドランさんは私をいつまで経っても子供扱いするんですから」

「子供扱いしているわけではないよ。大切な伴侶だから慮っているのだ。その違いを理解してもらえると嬉しいね」

「あら、ふふふ、そういう事なら許してあげちゃいます」

「ふむ、それは良かった。やはり言葉にしないと伝わらないものもあると、しみじみ思うよ」

私とセリナが案内をされたのは、ジャルラの中央付近にある岩盤の中を加工して建てられた館だった。

凹凸なく綺麗に研磨された壁には、何かしらの塗料で、ラミアやその伴侶と思しき他種族の雄達が戯画化されて描かれている。

ラミアの生態を分かりやすく描いた壁画と解釈出来るな。

「選挙で選ばれた女王が住む館です。今はママ——ええと、当代女王セリベアとその夫ジークベルトが住んでいるはずです。前は私もここに住んでいました」

「セリナにとっては懐かしの生まれ故郷に加えて、懐かしの我が家というわけか」

「ただ素敵な旦那様を見つけ帰ってきたという話なら、歓迎されるだけで済んだのですけれど、今回は使節団の案内役もしていますから前代未聞の帰省です」

周りのラミア達は私とセリナが気になって仕方がないようで、チラチラと様子を窺ってくるが、セリベア殿は一度だけこちらを振り返ったきりだ。内心では愛娘の帰還をどう思っているのやら。

ほどなく私達は、モレス山脈で見られる花や動物の他、独特の模様が刺繍された絨毯が敷かれた一室に通された。

室内では、ほのかな香気を発する蝋燭が燃えている。

私達の正面には長机が置かれ、向かいにはセリベア殿が、その左右には妙齢のラミアが一人ずつ、とぐろを巻いた下半身を椅子の代わりにして腰掛けた。セリナもよくしているラミア特有の動作で、私にとっては見慣れたものだ。

他のラミアや夫君達は、警護と私達の監視を兼ねて部屋の扉の傍や壁際に立っている。まあ、当然の警戒だ。

「どうぞお掛けください。ラミアの里ですが、椅子くらいはありますもの」

セリベア殿にそう言われ、私は用意されていた椅子に腰掛ける。

続いてセリナも母親達同様にとぐろを巻いた。

ふむ、私もそれなりに緊張している自覚はあったが、セリナが前代未聞の帰省と言っていたのを鑑みるに、ジャルラ側にとつても今回の事態への対応は暗中模索であろう。

さてさて、そうなるとお互い初体験同士、手探りでより良い落とし所を探し合わねばならんわな。私はそうして気を引き締めてから視線を落とす。机の上には、ジャルラの方で用意してくれた湯気が立つ赤い飲み物が置かれている。

春を半ば過ぎたとはいえ、山は冷える。待機している使節団の皆にも温かい飲み物を振る舞ってあげたいものだ。

さて、そろそろ話を始めるとしよう。

「ありがとうございます。私共がこちらをお訪ねした目的に関しては、既にご存じの事と申します。改めてお伝えいたします。我が主君ベルン男爵は、暗黒の荒野方面への開拓事業の他、エンテの森並びにモレス山脈の諸種族との交流が、領地の発展と民の繁栄に不可欠であると考えております。その為、こちらの里の出身者であるセリナ嬢の知恵を拝借し、本日、ご挨拶に伺った次第です」

私の言葉を聞き、セリベア殿が微笑む。

「補佐官殿、ベルンの方々が再び暗黒の荒野に興味を示された事に関しては、私達も把握しております。セリナから伝えられていたというわけではありませんわよ？ 暗黒の荒野やエンテの森に棲まう蛇は、時に私達の目や耳の代わりとなっておりますので、周辺の情報程度なら集めるのは難しくありません」

ふむ、さりげなくセリナがベルン男爵領の情報を流したわけではないと擁護されたのかな？

「そうでしたか。それでしたら、既に私共がリザード族や、水竜ウエド口殿の庇護を受けているアラの民と関係を構築している事もご存じで？」

「ええ。山脈を登ってくる者は稀ですが、それが集団となれば、いやが上にも注目が集まるのが道理でしょう。その集団の向かう先が、私達と遠からず近からずの距離を保っていたベルンの者なら、なおさらです。それにベルンが賑やかになったのは、今回が二度目ですからね」

「では、話を進めさせていただきたく存じます。私共が用意出来る対価と友好に関する取り決めなどを、こちらの資料にしたためております。一度、お目をお通しください。どうぞ」

セリナは私が預けておいた鞆から資料を取り出して、目の前に座る三人に渡す。

内容は先のリザード族やウアラの民達との交渉とほとんど変わらない。

お互いの集落に大使館を設置する案や、商取引の活発化、お互いの領内で法を犯した者への裁判権や雇用条件、居住を認める条件など数多くの取り決めだ。

魔物と一般に認知されるラミアを人間種と同様に扱い、不当な暴力や差別を加える事を固く禁じる法も明文化した。逆に、ラミアの側も魅了の魔法などで相手の意思を奪う形での誘惑を禁じている。これらは私個人としてもベルン男爵領としても重大事項だ。

種族単位での差異もあり、お互いに不便ないしは不利益を被る点もあるだろうが、双方で妥協点を見つけていくべしと、クリスとも話し合って結論を出している。

セリナから回ってきた資料の全文に目を通し終えたセリベア殿は、内心の読めぬ笑みを浮かべたまま、そっと資料を机の上に置く。

「ベルンの方々からのお申し出は確かに承りました。しかしながら、このジャルラの命運を担う一大事ですので、しばしの猶予を頂戴したく思います。そうお時間はお掛けしませんわ。数日の内に回答いたします。その間、外でお待ちになっている他の使節団の方も、どうぞジャルラにお入りください。少し、里の皆が浮足立つかもしれないかもしれませんが、そこはどうぞご容赦を。外からあれだけ多くの方がいらっしやるなど、過去にない事ですから」

「寛大なお言葉、感謝に堪えません。使節団の者達には厳しく伝えてありますが、彼らにとってもラミアの方々が住まわれる地を訪れるのは初めての体験ですので、不作法があるかもしれません。ほとんどの者は所帯を持たぬ独り身ですから、ジャルラの方々はいささか刺激的すぎます。何かございまして、ただちに厳罰をもって処します」

それを聞いて、セリベア殿はあらあら、と笑う。

ふうむ。

こちらに連絡を入れなければ、ちよつとした悪戯をしても目を瞑りますよ——と、私が言外に臭わせたのを察してくださったようだ。

団員の中には、まだ異性と手を繋いだ事もなさそうな子もちらほら居る。下半身が大蛇とはいえ、ラミアの色気には逆らえないだろう。ふうむ。

「生真面目でいらっしやいますのね。補佐官殿も本日はどうぞごゆるりとお休みください。館に部

屋をご用意してしましてよ。ただ、ジャルラの女王としてではなく、一個人として……ええ、そう、母親として、ぜひとも夫と娘を交えてお話をさせていたただきたく思いますの」

口元に笑みを浮かべたセリベア殿の笑っていない瞳が、拒否は絶対に許さぬと私に強く訴え掛けていた。

おおう、今は女王ではなく母親としての顔を前面に押し出してきたているな。心なしか、部屋の中に居るラミアの方達も先程よりも険しい視線を私に向けている気がする。

私がセリナに相応しい男かどうか、これから厳しい審査が待っているのだ。私は長机の下から伸びてきたセリナの手を、そっと握り返した。

ふむ、セリナから山ほど勇気を貰えたな。

それにしても、人間であるというセリナの父君はどんな方なのだろう。そしてセリベア殿も私的な場面ではどんな母親なのか。

私の個人的な人生最大の戦場に赴く時が刻一刻と迫っている。

今から心臓が破裂してしまいうそうだった。

十

ドランとセリナが里の外で待機している使節団を呼びに行っている間、セリベアはベルン村から一行を迎え入れるべく、指示を飛ばしていた。

元々、使節団を里の中へ招き入れる際の手順は取り決めてあったので、さして準備に時間は掛からない。

家の中で待機させていた里の者達に、野外へ出て使節団の為に用意した宿泊施設に続く道への飾りつけなどを行うように命令している。

セリナの帰省に伴ってよそから多数の男性が来訪するとあって、ジャルラの里は知らせが届いてからちよつとしたお祭りのような雰囲気になっていた。

特に、未婚のラミア達は大半が浮足立っていて、羽目を外しすぎないように、セリベアが何度か綱紀の引き締めを行わなければならなかったほどである。

「宿の手配はつつがなく行えているわね？ 初めてのお客様よ。手抜きがあつては末代までの恥だわ。使節団の馬は全てゴーレムですから、飼葉も水も用意する必要がないのは覚えてるわね。いらぬものを用意して、必要なものの手配を疎かにしないように」

先程までドラン達と会合していた部屋では、セリベアの指示に従って、ラミアとその伴侶達が激しく出入りしている。

セリベアはジャルラの女王という地位に就いてはいるものの、王制国家における国王ほど権威が

あるわけではない。

ジャルラにおける女王は代々選挙で選ばれ、人口が千人前後の小さな社会を効率的に機能させる為の称号と機構にすぎなかった。そんな事情もあり、セリベアに命令される側の者達からの返答もそれほど堅苦しくはなく、見知った者に対する言葉遣いだ。

「宿の手配は済んでます。ドラン補佐官様とセリナちゃんと使節団の偉い人達は、この館でしたよね？ 客室と食事の準備も大丈夫です！」

やや軽薄な口調で返事したのは、セリナよりもいくらか年上のラミアだ。彼女は報告を終えると、手に持っていた資料の紙を、他のラミアに手渡してさっさと部屋を後にした。

いくら他に仕事があるといっても、女王を相手にこのような態度を取るなど、周辺諸国の者達だったら目を丸くするだろう。

しかし、他のラミアはもとより、セリベア自身も気に留める様子はない。

ドラン達の前では全員、それなりに畏まった態度を取りもするが、内情を知るセリナが明らかに居る以上、あまり意味はないだろう。

「伴侶選びは向こうもある程度は理解を示してくれているけれど、無理強いをしては駄目よ！ 魅了の魔眼なんてもつての外よ」

セリベアにそう釘を刺されたラミアの一人が、あっけらかんと聞き返す。

「お酒をたっぷり飲ませた後で誘うのはありですか？」

「意識が朦朧とするほど飲ませるのはやめておきなさい。それと、自分に自信があるのなら、そしてラミアであるのなら、素面の相手を堂々と正面から射止めなさいな。はい、次！」

「使節団の案内役の一覧表です。全員既に所定の位置についています。使節団が里に入ったらすぐにも対応可能です。また、警備の方も人員の配置は万全です。グリフォンやワイバーンの襲来があっても、怪我人一人だつて出しません」

「よろしい、そこまで断言するなら見事実現なさい。最近はいびん達が大人しいとはいえ、決して油断しないように。使節団の皆さんは暗黒の荒野を経由しての旅で、お疲れでいらっしやるわ夕餉にお出しする食事は、なるべく胃腸への負担の小さいものを手配するように。お酒も口当たりの優しいものを用意するのを忘れないで」

それから何度かの質疑応答と状況の報告、確認を終え、セリベアはようやく一息吐いた。

部屋の中には彼女以外に姿はなく、全員がそれぞれの仕事を果たす為に里の各所へと散っている。ベルン側が魔物であるラミア主体のジャルラと交渉を持つのが初めてであるのと同様に、ジャルラ側もベルンほど大きな規模の人間種の集団との本格的な交渉は初めてだ。

セリナからの知らせが里に知れ渡った時には、まるで嵐でも起きたような騒ぎが生じ、それを鎮めるのに時間を随分と消費してしまった。

立ち読みサンプル
はここまで

種族単位で強力な魔法使いでもあるラミアの集団であるジャルラは、モレス山脈の中でも強大な勢力と言える。

しかしながら、モレス山脈の隠れ里では、耕作面積の少なさや、種の特性としての人口増加の難しさ、環境的にどうしても閉鎖的になってしまいうなど、問題もあった。

今回のベルン使節団の来訪は、それらの問題を全て解決とまではいかずとも、解決に向けて大きく前進させるきっかけになる。同時に、新たな問題を生じさせる可能性も秘めた、重要な転機だった。

セリベアにとって可愛い娘が伴侶を見つけてきた事は、母として、同じ女としてまことに喜ばしい。

しかし同時に、ジャルラの長として間違えられぬ決断を持ち帰ってきたのは、全くの想定外だったと言わざるを得ない。

余人の目がないのを確認し、セリベアは小さく息を吐いた。その瞬間を見透かしたかのように、小さくノックの音が響き、涼やかな男の声が続く。

「セリベア、入ってもいいかい？」

「ジークベルト？ ええ、どうぞ入って」

入室してきたのは、カップ二つとティーポットを載せたお盆を手にした男性。セリベアの伴侶で

あり、セリナの父親であるジークベルトだ。

セリナと同じ黄金の髪を持ち、理知的な光を宿した瞳も娘とよく似ている。

セリナの年齢を考えれば、若くても三十代後半か四十代前半であろうが、落ち着き払った雰囲気と暖かな陽だまりを連想させる柔和な顔立ちは、実際の年齢より十歳は若く見える。

「流石の君でも疲れが隠せていないな。警備の方の配置は問題ないから、安心してほしい。成体の竜はともかく、ワイバーンの群れならなんとかなる」

「そう。そちらの心配はしていないわ」

ジークベルトはジャルラの警備の一端を担う立場にある。一見すると優男めいた風貌だが、なかなかどうして一通りの武器を一流の腕前で使いこなす。その上、補助魔法の類も巧みな猛者だ。

「それと、これは差し入れだ」

セリベアは傍らにまで来たジークベルトが差し出したカップを受け取る。

長い付き合いの夫は、妻がこの状況で欲しているものを理解していた。

セリベアはカップを持ち上げてしばし香りを楽しんだ後、ほのかな蜂蜜の甘さを感じる琥珀色の液体を口に含んだ。

「ありがとう、一息入れられたわ」

「ああ、それは良かった。セリナが思ったよりもずっと早く帰ってきてくれたのは喜ばしいが、ま